
千の刃と千の銃弾

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の刃と千の銃弾

【Nコード】

N1611Z

【作者名】

ちゃんこっ

【あらすじ】

平和な日の突然の終わり。

神は人間を殺し、ゾンビとして自分の奴隷として扱おうとする。

そんな、神を殺す人間たちの下剋上。

（注意）主人公と敵主人公はチート並みの強さです。

主人公、ヒロイン、敵主人公、敵ヒロインの視点を変えながら書いていきますのでご了承ください。> m () m <

刃と魔界（前書き）

今回は、千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と魔界

【魔界】

一か月前までは平和だった・・・

魔法使いが攻撃魔法を使うような日はなかった・・・

人が魔物を切るような日なんてなかった・・・

銃使いが、人を撃つことはなかった・・・

なのに・・・

ある日・・・平和な日常は一瞬して、無くなった・・・

神が舞い降り、人を殺す・・・

そして、殺して使える奴はゾンビとして使う・・・

地獄だ

そして、人間が神を殺す時代 神が人間を殺す時代が始まった

俺、千歳ちとせ 大樹だいきも学生ながら戦っている

「はあはあ、こっちには誰もいなかったよ」

「そうか」

背が低く金髪でショートカットで目が赤色の女の子

こいつの名は、柊ひこいぎ 真奈まな

俺の幼馴染だ

俺達はこの魔界から脱出するために旅をしている

「じゃあ、ここには用はないな、出るぞ」

「ちよつと、待って・・・」

息を切らしている

そんなに遠くまで見てこなくていいのに・・・

「わかった、休憩だ。ゆっくり休め」

「ご、ごめん」

俺達はまだ人間だ

ゾンビにはなっていない・・・

後、どれだけ俺達が生き残れるだろう・・・

この魔界で・・・

巫女と帰り道（前書き）

今回は柊真奈ひいらぎまな視点です

巫女と帰り道

（やっぱり、やさしいな大君は……）
だいくん

こんなわけのわからない土地……

本来の私ならもう気がくるっていると思う……

でも、大君が気を使ってくれる

うれしいな……

でも、あの時は最悪だった

いつも一緒に帰って……

その日、自分の思いを告げようと思ったのに……

【帰り道、過去】

「今日のテスト、どうだった？」

「とりあえず、俺は魔法使いになれないことがわかった……」

「はは……やっぱり武器の召喚しかできないんだ……」

大君は、魔力こそは高いはずけどなぜか武器の召喚しかできない……

・

「仕方ないだろう？俺はもともと素質がなかったんだよ」

「そうかなあ、武器の召喚1000種類以上出せる時点ですごいよ
うな気がするけど」

「そう言う真奈は？」

「え！？……私は、いつも通りだったよ」

「はあ、やっぱり……」

自分で言うのもなんだけど、攻撃魔法以外なら使える……

やっぱりこれは血筋かなあ、巫女だし

「とりあえず、俺は今日のことを忘れる……」

「一週間もしない内にテストの結果帰ってくるよ？」

「だああああ！！なんで、テストの内容が3通りの魔法を見せるな
んだよ！！俺は一つしかできねえよ！！」

「まあまあ、叫んでも近所迷惑にしかないよ？」

「・・・別にいいと思っている」

「うゝん、じゃあ今度遊びにいかない？どっか」

「お、いいな。て言うか真奈から誘ってくれるのっていつ以来だ？」

「細かいことは気にしない」

「そうだな、っでどこ行く？」

「どのタイミングで告白しようかな？」

「帰り道の別れ際？今ここで？」

「うゝん迷っちゃうな・・・」

「・・・真奈、あれなんだと思う？」

「え？」

「大君が前の方に指を刺している・・・」

「そこには、ドラゴンがいた・・・」

刃とドラゴン

「・・・人間、殺す」

「な!？」

ドラゴンははつきりと言った

やばい・・・

真奈を守りながら戦えるか？

「な、なんでこんなところに・・・ドラゴンが・・・」

「まずは女!!すうすうすう」

溜めた!？

・・・待てよ教科書通りなら・・・

「真奈!火耐性の補助魔法を使い!」

真奈「え?え!？」

パニックになつている・・・

そうだ、この状態の真奈は魔法を詠唱しても・・・

「フレイブ・・・う~~~~!!」

100%舌を噛む!!

「くそ!!」

俺は手元に武器を召喚した

武器の召喚魔法は詠唱はいらない・・・

選んだ武器は・・・

れいとつふぶき
冷刀吹雪

この刀は自分の魔力を注入すると、吹雪が起こる

「間に合え!!」

「ガアア!!!」

炎をプレスが迫ってくる・・・

だが、間に合った

「ツチ!、やるな、学生のくせに・・・」

「なんで、俺達を殺そうとする!」

「お前達だけじゃない・・・人間すべて殺す・・・要は戦争だ」

「ドラゴン対人間でか？勝てると思っっているのか？」

「いいや、ドラゴン、モンスター連合と神様対人間だ」

「は？頭くるってんのか？神が人間を殺すわけ」

「あるんですよ・・・」

「！誰だ！？」

ドラゴンの足元から黒髪の長い女性が現れた・・・

服装は、絵画に書かれている天女の服装・・・

「私の名は、神宮^{かみや}皐月^{さつき}・・・女神の命令で人間を殺しに来ました」

「・・・」

（やばいな・・・神と戦うのはどうでもいい、今それより重要なことは）

「・・・どうした？顔色悪いぞ？」

神・・・皐月の後ろに銃を持って男が立っている・・・

銀髪のショートカットで、マントをもう片方の手で持っている

その男は、ドラゴン、神、なんかよりものすごい魔力を持っている・・・

魔力は誰でも感じる事ができる・・・

だけど、それを感じるのは同じくらいの魔力だけ・・・

俺は他の魔法を使えないが、魔力は多い

だから、ほかのやつらには俺の魔力を感じる事さえできない・・・
だが・・・

神、皐月の後ろに立っている奴は俺と同じぐらいの魔力を持っている・・・

こんなこと初めてだ・・・

逃げないとやばい・・・

3対2で分も悪い・・・

逃げないといけない・・・

だが・・・

「はあ、さっさと終わらせるぞ？」

パアン！！キイン！！

撃ってきた弾を刀ではじいた

はい・・・・今まで見たなによりも

「お！勘違いじゃないか・・・・やっぱりお前魔力高かったのか」

「・・・・てめえも、十分高いだろ・・・・」

「まあな、さて・・・・お前の実力が知りたくなってきたな・・・・」

「・・・・名前は？」

「かみやりよう神宮亮・・・・元大学生のゾンビだ」

「ちとせ だいき千歳大樹・・・・高校生」

ゾンビか・・・・なぜか知りたいが、そんな場合じゃない・・・・

「ちよつと、亮。殺さないといけないんだけど」

「わかってるって、皐月そのためにこいつの実力を試すだけだから」

パアン！！パアン！！

俺に向かつてきてない・・・・

狙いは・・・・真奈！！

巫女と力の差（前書き）

今回は、ひいらぎな柊真奈視点です

巫女と力の差

大君が私より強くて魔力が高いことは知っていた・・・
だけど、その力と同じぐらいの人がいるなんて思いもしなかった

キーン、キーン！！

大君は刀で、相手の銃弾を防ぎながら私の盾となっている

「真奈！！立てるな？」

「う、うん」

「とにかく、ここから逃げるぞ！！」

「わ、わかった」

私たちは走って逃げようとしたが・・・

一瞬のうちに・・・

ドラゴンは後ろに・・・

「逃げれると思うか？」

神は、私たちの横側に・・・

「逃がしはしません」

そして・・・大君と同じぐらいの魔力を持つ相手は・・・正面から・

・

「おいおい、逃げるなよ」

ゆっくりと・・・歩いてきている・・・

大ピンチ・・・

私の頭の中でそんな言葉が浮かんだ

そして、もう一つ・・・

お荷物・・・

そう、私は今大君のお荷物、邪魔なだけだ・・・

「クソ！！」

大君は新たなに武器を取り出した

盾だ・・・

私が知っている限りじゃ大君は盾を使わない・・・

攻撃だけで防ぎきれから・・・

だけど、今は・・・

「ガアア！！！！」

ドラゴンのブレス・・・

「フレイムランス！！」

攻撃魔法・・・

「さて、防ぎきれるか？」

銃弾・・・

私がいるだけで、この攻撃をすべてとはいわないかも知れないけど、避けれない・・・

多分、私はどれか一つでも当たれば死ぬと思う

「真奈！俺がおとりになる、その間に逃げろ」

「え・・・」

おとり・・・？

何言ってるの？大君・・・

それを言うなら・・・逆じゃないの？私の方が弱いから・・・

お荷物って自覚はあった・・・

けど、今は離れなくなかった・・・

今、離れたらもう会えないような気がしたから・・・

「いや！！」

「真奈！！」

私に対して怒っている・・・

それも、そう・・・

私のわがままで大君のお荷物になっているから

巫女と力の差（後書き）

感想で、セリフ前に名前があるのは読みにくいと思いますと言われるので、ために作ってみました！！¥（o）ノ

できれば、前のと比べてみてどちらが読みやすいか感想してください
い>m（——）m<

こちらのほうが読みやすかったら前のやつすべてセリフ前に名前なしに書き直すつもりです！！＼（^o^）ノ

銃弾と次元転送魔法弾（前書き）

今回は、神宮亮^{かみやう}視点です

あと、セリフ前に名前は付けないことにしました（＾|＾）
（・）

銃弾と次元転送魔法弾

(うまく行けよ!!)

ドラゴンと皐月の攻撃が大樹盾に当たった

それに続くように俺も撃った

だけど俺は弾を変えていた・・・

次元転送魔法弾・・・

当たれば、どこか別の場所に行く便利な弾だ・・・

どこに行くかわからないのが不便だが、あいつなら大樹ならたぶん

大丈夫だろ・・・

そして、俺は撃った

盾を構えて女の子を守ろうとする大樹を・・・

ラッキーなことに女の子は今、大樹にしがみついている・・・

あのままなら一緒に次元転送してくれる

パン

「う!?なんだ・・・」

「きゃあああああ!!!!」

黒い渦が大樹と女の子を包み込み移動した・・・

その光景はドラゴンと真奈の攻撃で真奈たちには見えていない・・・

(まずは、最初の課題クリアと・・・)

俺は心の中でそう思った・・・

「逃げられた?なんで・・・」

「まあ、あっちも強いってことだな・・・」

「ふざけるな!!俺はまだ戦いたいんだぞ!!」

ドラゴンが鼻息をあららしくしていった

・・・こいつは邪魔だな・・・

「お前は、邪魔だ・・・」

パン

「ぐあああ!!!!」

ドラゴンが倒れた・・・
皐月はそれをぼうと見ている・・・
皐月は真面目な性格だ・・・
そして、恩は絶対に忘れない・・・
そのせいで、いまだに騙されている・・・
あの、悪魔のような神に・・・

神と女神の命令

私は死んだ、亮が病死して間もなく・・・

だけど、今は神様の・・・女神様のおかげで私たちは生きている・・・

・ゾンビとして

別にどんな姿でもいい・・・

亮と一緒にいたい・・・

永遠に・・・

それが、私の・・・私たちの願い・・・

「亮！何してるの？」

亮がドラゴンを撃った・・・

そのドラゴンは死んだ！確実に

亮の魔力は底知れないほど多い・・・

もしかしたら、神よりも・・・

いや、亮は神以上の力を持っている・・・

今の私は神だ・・・下級の神だが、だけど亮はわたしより強い・・・

なんで私が神に選ばれ、亮が神に選ばれなかったのか・・・

その理由がわからない・・・

どうしてだろう・・・

でも、私たちがまた一緒にいれる

だから、私は神様に感謝している

「まあ、俺にも考えがあるんだよ」

「・・・できるかぎり殺さないでね？」

「わかってるよ・・・お前が殺しが苦手なことぐらい」

そう、私は殺しは苦手だ・・・

いや、血を見るのも嫌だ・・・

でも、これもすべて・・・

女神の命令だから・・・

刃と食糧（前書き）

今回は、千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と食糧

「さて、そろそろ行くぞ？」

十分な休憩はとった

そろそろいいか、と思ったあたりで真奈に声をかけた
そしたら・・・

「すうすう・・・」

（たく・・・俺に寄りかかってきたと思ったたら寝てやがる・・・人の気もしらないで・・・）

はつきり言つて俺は真奈のことが好きだ

こいつのためなら命をも投げ出すくらいの覚悟はある

だけど、もしこいつが・・・俺が真奈に告白して嫌いになられたら・・・

そう思うと怖い・・・

今のままでいい・・・

だが、いつまでもこのままでいい訳がない

「はあ、どうしようかな・・・これから・・・」

俺も知らない魔界・・・

どんな強力なやつが出てくるかわからない

上には上がいる・・・一か月前の亮のように・・・

いつまで・・・守りながら戦えるだろう・・・

非常食もあとわずか・・・

もう、真奈の持っているチョコレートぐらいだ

今日中に、食料の確保をしないとやばい

巫女と夢（前書き）

今回は、柊^{ひいらぎ} 真奈^{まな}視点です

巫女と夢

「う・うん」

「起きたか、真奈」

私はいつの間にか大君に寄りかかって寝ていた夢を見ていた・・・

そこは、大君と一緒に幸せな生活を送っている夢・・・
なんでだろう・・・

少し前までは、現実味があつたのに・・・
今はないと思つた・・・

「ねえ、行かないといけない？」

「食料がそろそろ見つけねえといけないからな・・・」

「そ、そうだったね・・・」

「どうした？急に？」

「ちよつと、不安になつて・・・」

「大丈夫だつていつだつて守つてやるよ」

大君は一か月間魔物と戦つた・・・

全部私は補助魔法と回復魔法しか使っていない・・・
攻撃魔法は邪魔だからだ・・・

それに対して、大君はずつと前線で戦っている・・・
多分そろそろ、精神的にはきついはずだ・・・なのに・・・

そんな状態なのに・・・

ずっと励ましてくれる・・・

「お、ここに人間がいるつてめずらしいな・・・」

「！！！」

「え！？」

「さて、神様のために死んでもらうぞ」

刃と竜巻（前書き）

今回は千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と竜巻

「召喚魔法・・・ケルベロス!!」

相手は、召喚魔法を使った

オオカミみたいなのが召喚されている
めんどうだな

「真奈!ちよつと離れてろ!!」

「う、うん」

(ツチ!人間じゃねえなこいつ・・・神のためか・・・なら!!)
俺は手元に刀・・・風斬かせぎりを召喚した

この武器は比較的に軽い・・・

しかも、使用者の魔力によって振った時に竜巻が起こったりする
俺の場合絶対に竜巻が起こる!!

「おつら!!」

ブン!!

竜巻が3個ほど出た

「な!」

「アオーン!!」

命中だ

「うああああ!!!!!!」

ケルベロスは消え、残ったのは男だけ・・・

「おい、ちよつと聞きたいんだが・・・」

「ツヒ!」

「案内してくれないか?魔界の出口まで・・・」

「それは・・・」

さつき、神ためって言った

人が言う可能性は少ない、ならこいつはゾンビだ

「ゾンビの殺し方は知らねえけど・・・首切ったら多分動けなくは
なるよな?」

「わ、わかった！！出口は知らねえけど、出口見てえな場所なら知ってる！」

「どこだ」

「この道をまっすぐ行っただぐらいに村がある・・・多分そこから出ることができる」

「他には？」

「し、知らねえ」

「そうか・・・」

俺は武器を消した・・・

「さっさとどっか行け！！俺の気が変わらない内にな・・・」

「は、はい！！」

男は走って逃げて行った・・・

・・・嘘だろ？・・・

・・・倒しはしたけど、竜巻の威力は殺せるぐらいはあったはず・・・

・

・・・なのに、あいつは無傷・・・どんだけ、ゾンビ強いんだよ・・・

・

「大君？大丈夫？」

「ああ、脱出できる場所が分かったから行こうぜ」

「ちよつと、準備さして・・・」

銃弾と発見（前書き）

今回は神宮亮かみやりょう視点です

銃弾と発見

（ふう、やっと見つけた・・・）

遠くの方で、大樹と近くにいた女の子が見える・・・

「どうかした？ 亮？」

「いや、すごい風だったなあと思ってな・・・」

「確かにすごかったわね・・・」

ついさつき、突風が吹いた・・・

魔界ではそんなことが起きることはない

なら、誰かが起こした

近くにいればわかるが、近くにはいない

よほどの強いやつしか無理だ

だけど、そんな強いやつゾンビの中にはいなかった

なら、人間だ・・・そして、心当たりもある・・・

だから、俺はその方向を見た

いた

思わずにやけてしまった

ここ一か月噂さえも聞かたなかったから、俺の見込み違いだとも思ったが

一番生存率が低い、ここで生き残っていたとは

「臯月、ちよつと行きたいところあるんだが・・・」

「駄目よ、これから女神と会うんだから」

「・・・まあ、いつか。一つ聞くけど、まだ感謝してるのか？ あの女神に・・・」

「そうよ、だって死んだ私達を生き返らせてくれたのよ？」

「その代り、いいように使われてないか？」

「仕方ないじゃない、それぐらいだったらいわ・・・」

「それぐらいねえ・・・」

絶対無理している・・・そんなことぐらいはわかる

だ^がど、今の俺ではこ^のいつを助けることができない

銃弾と発見（後書き）

もしかしたら、これからモンハンに時間を取られて更新が遅れたりするかもしれませんが、頑張って書き続けたいと思います

巫女と魔力の量（前書き）

今回は柊真奈ひいらぎまな視点です

巫女と魔力の量

「・・・おなかすいたね・・・」

「ああ・・・と言うかお前はチョコ残ってなかったか？」

「大君が食べないのに私だけ食べるなんてできないでしょ」

「別に俺は動けるからいいがお前は結構やばいんじゃないか？」

う・・・的を得ている

魔法には体力を使う

私たちは魔法使いでも・・・魔力の量が違う

私が回復魔法を使うのと、大君が武器を召喚するので魔力の差がある
それだけ、差がある

だから、大君は基本的には自分はある限り食べてない

こういう時は、実感させられる

私は足手まといなんだなあ

「お、村が見えてきたぞ」

「え！？」

私は大君の視線の先を見た

確かに村がある

だけど・・・

「全員人間とはちよつと違うな・・・」

「うん」

尻尾が生えていたり、角が生えたりしている

人間に限りなく近いけど、ちよつと魔物が混じっている

「とにかく、行ってみるか・・・あの数なら逃げるくらいなら何と
かなるだろう・・・」

・・・ざつと見渡した限りで10個ほど家がある・・・

多分、50人ぐらいだろうな

なのに、大君は何とかなるって言った

そこまで、強いんだ

私は魔力の差がありすぎて、大君の魔力の量を図ることができない

「じゃあ、行こうか・・・」

「そうだね」

刃と村（前書き）

今回は千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と村

【村】

さて、一応すぐに戦えるようにしよう・・・

「あ・・・」

「人間？本物の？」

俺達は堂々と村に入った

・・・何かがおかしい・・・

みんな元気がない？

「あもう・・・」

「うん？なにかなあ？」

真奈が聞き返す

「人間？お姉ちゃん」

「そうだよ」

周りが騒ぎだした・・・

やばいか？

て言うか、真奈正直すぎ・・・

「本当に人間なんですネ・・・」

「あ・・・ああ」

「よかったあ！！！！じゃあ、神様は私たちのこと聞いてくれたんだね！！！」

「神様？」

戦争じゃないのか？

俺達人間と神様、魔物たちの・・・

「どういうことですか？」

「私たちは見ての通り、ちょっと魔物です・・・いうゆる落ちこぼれ」

「だから、見放された。そして、神に願いました・・・」

「人間にしてくださいと・・・」

「！！」

俺と真奈は驚いた

人間にしてください・・・

もし、神にそれが届いたなら完全なる神への宣戦布告・・・

もしかして、やばいんじゃないのか・・・

この村！！

神と女神（前書き）

今回は、神宮^{かみや}皐月^{さつき}視点です

神と女神

【女神の宮殿】

「よく、きましたね・・・」

「お久しぶりです！！女神様！！」

女神・・・私たちを生き返らせてくれた神だ
中でも、上級でほかの神の従えている

私もその一人だ

「・・・」

亮が睨みつける

「亮、あいさつ・・・」

「別にいいです、亮はよく戦っていることを知っていますので・・・」

「

「俺を名前で呼ぶんじゃない、苗字で呼べ」

「ならば、神宮でいいでしょうか？」

「あの・・・それだと、私もなんですけど・・・」

「・・・まあ、あなたは皐月と呼ぶので・・・」

「そう言えば、私たちが呼ばれた理由はなんなんでしょうか？」

そう、私たちは人間の殲滅を行っていたんだけど急に呼び戻された

「実は、この近辺に村がありました・・・そこを滅ぼしてきて欲しいのです」

「！！・・・来た・・・」

殺しの命令

本心ではいやだ・・・でも

「わかりました・・・でも、私達だけでしょうか？」

「一応、魔物たちは集めていますのでその指揮をお願いします」

「数は？」

亮が訪ねる

「こちらは、1000・・・あちらは50いるかいなかでしょう」

ね」

「！！・・・うそでしょ？」

それって勝敗が決まっているじゃない・・・

こちらの勝ちで・・・

「いつからだ？」

「明日か明後日ぐらいにでも行ってください・・・では・・・」

明日か明後日・・・

それで・・・50人の命が消えるの？

銃弾と接触（前書き）

今回は、神宮亮かみやりょう視点です

銃弾と接触

今から行くか

俺は用意された部屋に荷物を置いて、皐月に用を済ませてくると言い出かけた

もちろん、村にだ

俺の速さなら、30分もかからない

【村】

「おい！！だれがいるか！？」

「だれだ？」

「！！！！」

大樹！？なんでこんなとこいんだよ
いや、いまは好都合か？

「何しに来た？」

威嚇しながら俺に聞いてくる

「戦う意思はない、聞くだけ聞け」

「ここに飛ばしたのおまえだろ・・・」

「明日か明後日にここに魔物が攻めてくる・・・ここに村人に伝える。ここを離れろって」

大樹が少し驚いたような顔をして、また聞いてくる

「一つ聞くが・・・本当に戦う意思はないんだな？」

「ああ、俺はいらない殺しはしない」

「ついてきてくれ・・・」

俺は大樹に後について行った

そこは村の中心に建てられた家だ

結構デカイ

「あ、だれだっ・・・！！」

「安心してくれ、こいつは情報を持ってきた」

「情報？」

村の娘みたいなのが首をかしげる

「明日か明後日ぐらいに1000ものの魔物が攻めてくる・・・だから、その前に逃げてくれ」

「1000!!?」

「うそ・・・」

まあ、驚くだろうな・・・あれ?何で・・・

「え?・・・どうして、逃げる準備をしないんだ?」

「・・・無理なんだよ、ここから逃げるのは・・・」

大樹がつらそうな顔をして言い返す

「どういう・・・あ!!」

よく、見ると村娘と村人・・・ほかの人たちも尻尾が生えていたりする

まさか・・・

「ここ以外、行く場所がないのか・・・」

「ああ、人間の世界に行く道はあるが入れるのが一日3人まで・・・」

「

「・・・ついでに、今日はもう3人入って行きました・・・」

「マジかよ・・・」

俺の次元転送弾はどこ行くかわからない

下手をすると溶岩の中などに入る

俺と大樹でももう一人守るので精いっぱいになるだろう

50人近いのを守りながら戦うのは無理だ

しかも、俺は立場上はあっち・・・敵側だ

万事休す・・・いや、まだ方法はあるが・・・大樹が乗ってくれるか

「亮、だったよな?あんたの名前・・・」

「ああ」

「話があるからついてきてくれないか?」

「わかった」

俺達は家を出た

刃と魔力通信（前書き）

今回は千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と魔力通信

「なんでお前は敵側なんだ？」

外に連れ出して今、俺が一番気になることを聞いた

亮は強い、そして、なぜか俺達を助けようとする・・・
なぜだ？

「・・・俺の嫁、皐月のこと覚えているか？」

「一緒にいたやつだったな・・・」

「皐月が神になった理由は知らねえけど、多分俺を制御するために
神にされたんだ」

「どういうことだ？」

ちよつと理解ができない

「お前なら一番大切なものを人質に取られたらどうする？・・・俺
は言いなりになっている」

「！！」

そつか・・・亮の力が欲しいためか

「多分、俺が女神などを殺そうとすると皐月は死ぬ・・・こんどこ
そ終わりだろう」

「終わり？」

「・・・あいつは罪があるんだ・・・自殺って言っ」

「・・・そう言えば、亮はゾンビだったよな・・・なんで死んだん
だ？」

「病死、これは仕方ないが皐月は俺が死んだあと、すぐに死んだら
しい」

「それでか・・・」

自殺する気持ちはわかる・・・俺の真奈が死んだらその考えが浮か
ぶだろう

「この情報は上の位の神に聞いたからあっているだろう」

「わかった・・・亮を仲間にしようとするのはあきらめ・・・」

「別にいいぞ？お前の仲間で」

「え？」

何言ってるんだ？亮は・・・

敵同士だから仲間にはなれないんじゃない

「お前できるよな？魔力通信」

「できるけど・・・」

魔力通信・・・自分の魔力を使い会話することだ

ついでに会話をしたい相手の魔力番号を記憶していないとできない
そのせいで俺は一度もかかってきたことがない

魔力番号は魔力が高いほど、番号がおおくなるから

「俺達ぐらいの魔力なら盗聴される心配はない・・・これが俺の魔力通信番号あとでかけてくれ」

小さな紙を手渡してきた

「おい」

「そろそろ、時間だから帰るは」

そう言つて立ち去った

俺の魔力番号は3万ケタ

亮は・・・3万ケタ

お互い苦労するな

人に教えるとき

ほろりと涙が出た気がした

と言うか俺・・・今からこれ覚えなれないんだな

神と裏切り（前書き）

今回は神宮^{かみや}皐月^{さつき}視点です

神と裏切り

【夜】

どうしよう

・・・村人を殺さないといけないのに・・・
殺したくない

でも、でも・・・

・・・こういう時は亮に相談した方がいいわよね・・・

「起きているか？ 臯月？」

「亮！？」

「ちよつと、話したいことがあつてな・・・」

「なに？ なに！？」

私は興奮している、こんなこと死んでから初めてだからだ
いや、生きているときもそんなになかった

亮は基本的には一人で何とかしているからだ

「もし、俺が女神を裏切ったらだ・・・」

「え？」

裏切ったら？

何を言ってるの？ 亮・・・

「俺が女神を裏切ったりしたらお前は どうする？」

「どうしようもないよ・・・私の命は女神が持つて・・・すぐに
殺されるに決まってる・・・」

「殺されるに決まってるか・・・わかった聞きたかったのはそれだ
けど・・・寝たほうがいいぞ？」

「うん・・・」

なんで亮は聞きに來たんだろう

でも、裏切るかあ

もし、私の命が私の命だったら・・・そうしてただろうな
そして、私は眠りについた

巫女と気持ち（前書き）

今回は、柊真奈ひいらぎまな視点です

巫女と気持ち

【朝】

大君は1000の軍隊に立ち向かうといった

理由はわからないけど、大丈夫らしい

あの亮って人もいつの間にかいない

いつ攻めてくるかもわからない

けど、大君はぐっすりと寝ている

なんだろう

でも、久しぶりに見たかな？

大君がこんなにも寝てるなんて・・・

「あれ？まだ大樹起きてないのか？」

敵！？

「！！・・・フレイム・・・」

私は魔法を唱えようとしたしかし・・・

「ストップストップ、寝込みとか襲わねえよ俺は」

「・・・」

警戒は解けない

この人は大君と同じぐらいの力を持っている

襲われたらどうしようもないけど、でも少しぐらいなら時間を稼げる

「あ、ついでに今日は攻めて来ないぞ？」

「そう・・・なら大君は起こさないであげて・・・」

「確かに、だいぶ魔力が減っていたな」

「やっぱり、あなたはわかるんだ。大君の魔力」

「こればかりは生まれてからだからな・・・」

生まれてからか・・・いいなあ。私も大君と同じ力があれば

「・・・私ってお荷物だと思う？客観的から見て・・・」

聞いてみた・・・

同じぐらいの魔力の持ち主なら今の私がどんな風に見えているか気

になったからだ

「・・・お荷物ではないだろうな・・・」

「どうして!？」

私の予想した答えと違うのが帰ってきた

「こいつを見てたらわかるよ・・・こいつがお前のこと好きだってことがな」

「へ?っへ?」

どういうこと?

大君が私のこと好き?

そんなことあるわけ・・・

「考えてみるよ、最初に戦った時こいつはどういう風に戦っていた?」

「盾を構えて・・・」

自分の身も盾にしていた・・・

「ああ、お前に怪我がないようにな」

「え?それがどうか・・・」

「はつきり言うぞ?あの戦いお前を守らなければ激戦になってた」
「激戦?」

十分、激戦だったと思うけどな・・・

「多分、あの場所を中心に焼け野原ができただろうな」

「うそ・・・」

「でも、こいつは戦わなかった・・・どこからどう見てもお前を守るためにだ」

「・・・」

「わかったか?これで・・・こいつはおまえのことが・・・」

「ストップ!!」

大君が急に起きた

「わ!!」

私はびつくりして、声を上げた

「お、起きたか」

大君と同じ魔力を持っている人はのんきな声で答えていた

刃と偽り（前書き）

今回は、千歳大樹ちとせ だいき視点です

刃と偽り

!!・・・嘘だろ!?

なんで俺の気持ちが見が知られてんだよ!!

「何しに来た?」

「世間話」

亮はあくまで知らないふりをする

「本当か?」

今度は真奈に聞いた

「ほ、本当だよ」

視線をそれしながら言った

・・・絶対嘘だ

でも、ここで問い詰めても意味ないな

「っで? ゾンビ様は何しにここにきたんだ?」

「ああ、そうだったな、とりあえず今日はまだ来ないあとな・・・

お前、どれだけ後戦える?」

「は?」

どれだけ戦える?

どういうことだ?

「お前は一般人だ・・・だから別に戦いたくなかったら戦わなくてもいい。今のお前は選ぶことができる」

「選ぶことが?」

「お前は無意識の間に戦わなくちゃっと思ってるが、お前は自分を守るほどの力を持っているんだ。だから、ここから脱出したら戦わなくてもいいだぞ?」

「でも、これは戦争だろ?」

「ああ、でもな戦争だからって戦いたくなかったら戦わなくてもいいんだ。・・・それだけはわかっていろ」

「・・・」

俺は黙るしかなかった

亮は俺のことを心配してくれている

なぜだか、わからないが俺に戦わせたくないみたいだ

確かに、亮の言ってることは理にかなっているけど・・・俺は・・・

・

「すまないが、亮・・・俺は戦う」

「どうしてだ？」

「・・・強いて言うならちよつとした復讐だ」

「そのちよつとした復讐で・・・真奈ちゃんが犠牲になったら？」

「させねえよ・・・そんなこと」

ドスの聞いた声が出た

「・・・そうか・・・お前が決めたんならそれでいい」

そう言つて亮は帰つた

・・・さて

「真奈」

「はい？」

「・・・お前はここから魔界から帰つたら、俺に付いて来るな」

「・・・え？」

「何もできないのに、ずっと一緒にいたのがいけなかったのかな？」（前書き）

今回から、サブタイトルを変えたいと思います！！
あと、今回は柊真奈ひいらぎまな視点です

「何もできないのに、ずっと一緒にいたのがいけなかったのかな？」

・・・え？

嫌だ

私は

ずっと大君について行きたい

「いや!!」

「付いて来るな!! わかってるだろ!?! このままずっとお前を守り続ける保証はないんだ!」

「でも、でも・・・」

「・・・あのなあ、はっきり言って迷惑なんだよ!!」
え？

その瞬間私はびっくりした

迷惑

自覚はあったけど

言われると

きついな

「好きでもねえやつにずっとまとわりつかれんのは!!」

「!!!!」

・・・私はその場から逃げ出した・・・

『好きでもないやつ』

振られた

ずっと幼い頃から好きだった人に

私は走り続けた

そしたら・・・

「ここ・・・どこ？」

周りはいつの間にか知らない景色に変わっていた

周りは木しかたってない森

村の奥の方に行ってしまったのかも知れない

どうしよう

適当に走っていたから帰り道がわからない

ガサガサ

「ヒッ!!」

誰かいる

どうしよう

私ひとりじゃ何もできない

助けて

大君

「何もできないのに、ずっと一緒にいたのがいけなかったのかな？」（後書き）

できたら、サブタイトルの感想をください>m（——）<m<

「私は女神の命令がないかぎり誰も殺したくはない」(前書き)

今回は、神宮^{かみや}皐月^{さつき}視点です

「私は女神の命令がないかぎり誰も殺したくはない」

私は気分転換のため近くの森に来ていた
そして・・・

「あなた・・・確か、この前会ったわね」

一か月前ほどに殺そうした相手にであつた

私たちが殺しにかかつて唯一逃げ出した相手だから覚えている

「たす・・・けて・・・」

おびえている

本当は殺さないといけないでしょうけど・・・

「安心しなさい、今あなたを殺しても意味ないから」

「意味がない？」

「だから、その涙をこのハンカチでふいて？」

私はハンカチを彼女に渡した

彼女は恐る恐る手に取って自分の涙を拭いた

「そう言えば？彼氏さんは？一緒じゃないの？」

「彼氏じゃありません」

「え？・・・そうなの？」

「はい・・・」

・・・不思議なこともあるのね・・・

てつきり付き合っているものだと思っていたわ

「あの・・・ちょっと話してもいいですか？」

「その彼氏さんのこと？」

「はい」

・・・ちよつとだけ気になつてきちゃったな・・・

「いいわ、話してみて？」

「はい・・・実は・・・」

30分後

・・・彼女は夫君つて子のことを話した

そして、自分がどんだけ好きって言うことと振られたことを・・・
「う・・・ひぐっ！」

「また、泣いちゃったね」

私は返されたハンカチをまた渡した

「振られる覚悟はありました・・・けど・・・」

「確かに今の話を聞いた限りじゃ振られたわね・・・でも、それ彼の本心かしら？」

「え？」

私は一度しか見たことがない

けど、私はこれでも人を見る目はあるつもりだ
たとえそれが一度しか見たことがない相手でも

「自分を盾してまであなたを助けたのよ？」

「・・・」

「別にどうでもいい、相手ならそんなことはしない・・・多分、彼が『迷惑だ』って言ったのあなたのためを思っただけじゃないの？」

「で、でも・・・」

「弱気にならない、まだあなたたちは生きているのだからチャンスはいくらでもあるわ」

「ありがとうございます・・・皐月さん」

「どういたしまして・・・さて、私はそろそろ帰るわね？」

「・・・帰り道わかります？」

「・・・ん？」

今の質問されたのかしら？

それとも・・・

「あの、実は私迷子で・・・」

やっぱりそうね・・・

「はあ、この道をまっすぐ行ったら村に着くからいきなさい」

「何から、何までありがとうございました!!」

走って行った

そう言えば・・・明日だっけ

村を滅ぼさないといけないの

悪いことしちゃったな

明日死ぬかもしれないのに、恋愛相談なんて

「俺は自分の力だけで守りたいものは絶対に守る・・・そう俺に誓ったんだ」

今回は、千歳大樹ちとせ だいき視点です

「俺は自分の力だけで守りたいものは絶対に守る・・・そう俺に誓ったんだ」

【次の日・・・村、１キロ先】

・・・ここはすごいな

村からたった一キロしか離れていないのに全体を見渡すことができる焼け野原

確かに、亮の言う通りここなら俺達が暴れても問題ないな
やってやるか

・・・真奈は置いてきた・・・

昨日、あれからすぐ帰ってきてなにもなかったからよかった

・・・やっぱり好きなやつには幸せになってほしいからな

「・・・お前が・・・村の代表か？」

・・・打ち合わせ通り、亮が来た

後ろには、確かにものすごい数の敵がいる

さて・・・

「さつさと始めるぞ!!!」

俺は冷凍吹雪であたり一面に吹雪を発生させた

「小細工は意味ねえんだよ!!」

それをものともせずに亮が突っ込んでくる

・・・打ち合わせの内容は簡単だ

俺達がいっつきり戦うふりをする

そして、隙を見て軍隊を攻撃

むろん、村の方向に被害がいかないように戦う

「・・・おい」

魔力通信で亮が話しかけてくる

「なんだ？」

亮の弾丸を防ぎながら話をする

「真奈ちゃんはどうした？」

「おいてきたよ・・・危ないから・・・」

「・・・守るんじゃないかったのか？」

「守るさ・・・絶対にな・・・」

「・・・お前はまだ自分の実力をわかっていないな・・・」
いきなり、亮が撃つのをやめた

そして・・・

「ここからは本気だ・・・」

そう言った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1611z/>

千の刃と千の銃弾

2011年12月26日21時10分発行